

New Edition UNICORN ライティング 「書くこと」の効果について考える

長野県松本蟻ヶ崎高等学校

藤澤 由夏

1. はじめに

英語教育に「発信力の強化」が求められています。しかし、発信のための readiness を整える指導として、「書くこと→思考整理」の指導を強化しない限りは発信力の向上を期待することはできないと思います。先日ある勉強会で、某大学の先生方がそれぞれのお立場で「学習に不可欠な書くことの指導が絶対的に不足している」ことを嘆き、「書くことの徹底指導は学力向上をもたらす」ということを強調しておられました。まったく同感です。今回貴重な機会をいただきましたので、この紙面をお借りして、このことも含めて今後の英語指導のあり方についての私見や、現勤務校での Writing 指導などにおける小さな試みについて紹介させていただこうと思います。何かの参考になれば幸いです。

2. フィンランドの秘密

以前は北欧のおとぎ話の国のイメージが強かったフィンランドが、近年とみに注目を集めていることはご存知の通りです。同国は2003年のPISA調査においてトップレベルにまで登りつめたことから、「(PISA定義の)読解力」に優れた子どもを育成している国として“フィンランド本”ブームまで引き起こしています。

以前、2年間にわたって数名の先生方と共に「PISA定義の読解力をつけるための英語教科での指導のあり方」について考える機会をいただきましたが、まず文字通りの意味とPISA定義の読解力との違いを確認しあったことを記憶しています。これは英語では reading literacy と表され、「社会生活に必要な知識や技能を使って様々な問題を解決する力」と定義されています。reading を「思考すること」と訳すのは無理があるかもしれませんが、「PISA定義の読解力」≒「思考力を働かせ

て人生の様々な問題を解決する力」と解釈をしても良いのではないかと思います。私見ですが、国語や英語に限らず、すべての教科で思考整理がなされるまで「繰り返し書き直す」指導を徹底することで「思考力向上」をはじめ、大きな学習効果が期待できるのではないかと考えます。

ところで、フィンランドの学力(思考力)向上には「フィンランドモデル」と呼ばれる教育システムの後押しがあるようです(田中2008)。これには「少人数教育」と「学習が遅れがちな子どもに対する徹底した個別補習」、「質の高い教員」、「高校終了までの授業料と給食費の無料化」、「読み書き計算の徹底指導」、「効果的な共同学習と思考整理」など、理想的なものが盛り込まれています。また、「家庭の教育力」に期待できる国であることも注目すべき点です。ほとんどの家庭で午後5時過ぎには両親が帰宅し、食卓を囲み、親子で「読み書き計算」の勉強をし、読書に親しむ、という生活が当たり前の国が存在する一方で、家族がそれぞれ勝手な生活をし、親たちが幼児を伴って深夜のコンビニで立ち読みをするような光景も珍しくなくなった我が国の現状を考えると、この北欧の国は夢の国のように思えてしまいます。

3. 発信のための readiness と「書くこと」

2013年度に導入予定の新学習指導要領では、「4技能の統合」と「発信力の向上」に焦点があてられ、科目構成の見直しもあると聞いています(旺文社教育情報センター2007)。発信力向上については、母語でのそれと、発信のための readiness を整えるために「書くこと→思考整理」の指導が不可欠です。現行の学習指導要領下の Writing においてもこの指導を「発信への準備」学習としてとりいれることで、文法指導に偏りがちな Writing という科目を本来の「考えて書く」活動を中心とした

ものに軌道修正することも可能になるのではないかと思います。初期段階では一文一文を正しく書く指導の中に「自分のこと」を書く機会を意図的に組み込むことから始めれば無理がないでしょう。徐々に「自分のことや情報を伝える」ことから「自分の考えを伝える」段階に移行し、「母語での思考を可能な限りレベルを落とさずに英語で書き表して読み手に伝える」ことが最終目標となります。批判の多い伝統的和文英訳が「他人が書いた和文を英語に直す」という機械的な学習であるのに対し、「自分のこと・自分の考え」を英語に直す Writing の学習は比較にならないほど独創的な学習活動なのです。ただ、非常に根本的な問題ですが、母語でできないことを英語でやろうとしても、それは無理な話です。本気で発信できる生徒を育てることを目指すのであれば、語彙力の強化に加え、背景知識をはじめとした readiness を豊かなものにするための工夫が必要でしょう。私の場合は Writing でも英語 I・II でも、生徒らの他教科での学習事項に関わることがらを例文や作文課題に入れるようにしています。些細なことですが、「架空の話」ではない「本当のこと」や「自分の気持ち」を伝えるための学習を仕組むことはそれほど難しいものではないような気がします。日頃の小さな努力を積み重ねることは、教える側にこそ大切なことなのかもしれません。即効性はないかもしれませんが、将来生徒が実の場で英語を運用するための素地を作る助けにはなるでしょう。

ところで、冒頭で述べたように「書くこと」は多くの技能を要し、「思考の整理」を助けてくれます。学力向上にもおおいに寄与することが期待されます。たとえばある topic について「自分の考えを整理して書くこと（発信すること）」を目標とした場合、その準備過程には、現行指導要領に記されている Writing の内容のほとんどと 4 技能すべての活動が含まれていることに驚かされます。たとえば New Edition UNICORN ENGLISH WRITING Lesson 22 以降では次のような指導が考えられます。

①教科書の topic についての情報を読み・聴きし

て収集

②①について自分の考えを書き出す

③②を読み直す

④再考しながら書き直し、再読しながら考えや情報を整理していく

というものです。この活動をグループで協同して考えをまとめる活動にすれば

⑤他者に自分の考えを話し伝える

⑥他者の意見を聴く

場合によっては、話し合いの中で正反合（弁証法）の体験も経てより高次な段階に到達することも期待できます。思考整理に伴い、それを表現する言葉もまた洗練されていきます。一連の活動は母語で行うことが多いと思いますが、集団の readiness に応じて英語で行うことを指示することも可能です。また、グループでの活動は小規模な discussion や debate の機会を与えることにもなり、これらを通して peer learning の実現をみることもなります。最終的に「自分の考えや関連情報を読み手や聞き手に理解されるように書く」際には、準備活動における思考整理が発信者に大きな自信を与える効果をもつことも見逃せません。これが本来の Writing の活動であり、言語の枠を超えた「書くこと」の指導でもあると思います。ここまで述べてきたものは冒頭で触れたとおり、Writing の学習であると同時に speech, debate など、様々な発信活動の readiness を整える過程にもなっています。

4. UNICORN ENGLISH WRITING を使用した指導

さて、私の担当学年では UNICORN ENGLISH WRITING を 2 年間に渡って指導しています。第 1 段階は 2 年次の Lesson1-21、第 2 段階は 3 年次の Lesson22 以降の学習です。前の項で述べた「書くこと」の指導例は主に第 2 段階のものです。以下に示すのは第 1 段階の指導例です。いわゆる進学希望者の多い学校の 2 年生に対する授業例であることと、私の担当する講座に限っての指導例であることをお断りしておきます。

乱暴かもしれませんが、私は一定レベル以上の生徒に対しては文法事項などの説明は最小限で良いと考えています。以前、説明をよそに問題を解き始めている生徒がかなり多くいることに気づいた時にこのことを実感しました。（そういえば自分が高校生の時もそうでしたが、）書いてあることは自分で読んで理解できるのです。教える側はどうしても「説明すること」や「教えこむこと」を重視しがちです。しかし、むしろ自分で理解することができるように生徒たちを仕向ける工夫こそが私たちの仕事なのではないかと考えます。私の担当する授業では、教科書や参考書などに示された大切なポイントや重要例文については暗記を指示して確認テストをし、あとはできるだけ多くの問題や作文問題を与えて文法事項を確認させるようにしています。教科書やワークブックに加え、UNICORN の指導書付属 CD-ROM に収録されているテスト集や例文集（主に入試問題を選択）を加工して利用しています。また、「自分のことを書いている」という感覚を持たせたいので、文章の一部を彼らに関連した語に置き換えて与えることもあります。

授業にはワークシートを活用しています。まず、FOCUS 文のドリルテストの後、導入として目標文を利用したリスニング活動をします（p.11 授業プリント 1 参照）。たとえば Lesson 11 の指導は次のような流れです。

①ワークシートの Fact Finding 型（斎藤 1996）の質問を読ませ、短いスピーチを聴かせ（2～3 回）解答を書かせる

②ペアワークでお互いの解答をチェックしあう（例解提示は難しいもののみ）

③CD の後についてリピート→パラレルリーディングをさせる

④この課の文法的なポイントが不定詞と動名詞であることを示し、再度文章を聴きながらこれらの文法事項を含む文章（または該当箇所）を書き出させ、ここで初めて教科書を開いて正しく書けたか確認させる（該当箇所の和訳にアンダーラインも引かせる）

⑤目標文に関して Making Inference 型 や Personal Involvement 型（斎藤 1996）の質問を与えて解答を書かせる（通常 <A>・ にはやや難易度差をつける。生徒は選択して解答する。<A> は ① を Making Inferences 型 / Personal Involvement 型にアレンジしたもので、一文一文をきちんと書くことを目標としたものである。英語の苦手な生徒も目標文を参考にしてほぼ完答が可能である。 は TEACHER'S MANUAL の OVER TO YOU を利用した物で、まとまった文章を書く必要がある）

教科書本体の指導では、EXERCISES の解答チェックがはずせませんが、例解をみながら誤り部分の訂正をさせるような指導では、それだけで学習が完了したような感じを持たせてしまいます。私は前もってワークシートを配布しておき、家庭学習で解答を書かせて提出させています。回収後には誤りに赤で印のみをつけて返却するようにしています。解答の記入にあたっては、たとえ選択問題であっても、英文と和文全文を書くように指示しています。ワークシートには [A / B / C] の評価欄を設け、全問正解は A に、3 箇所以内の誤りには B、それ以上の場合は C に○をつけて次の授業の冒頭で返却した後、特に誤りの多かった問題については解説を加えます。B、C の生徒は A の評価をもらうまで再提出を繰り返します。中には 2 回目以降の提出が滞ってしまう生徒もいますが、ほとんどの生徒は再度教科書や文法書を見直して訂正した後、再提出してきます。ここまでは文法事項を含む学習についての指導例です。

さて、この教科書を採択したのは、TRY YOUR SKILLS の部分で「自分のことを書く」機会を毎回与えることが可能であると考えたからでした。さらに TEACHER'S MANUAL にある OVER TO YOU も合わせることで生徒たちに自分自身や身のまわりのことを書く機会を十分に与えることができます。これは生徒に継続的な学習の機会を与えるために家庭学習で完成させて提出させています（ここでいう継続的な学習とは、家庭学習のみをさすものではありません。たとえば「夢につい

